

The Metamorphosis of Nature in Melville

Noguchi Kenji
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1355916>

出版情報：英語英文学論叢. 40, pp.35-44, 1990-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：



Melville における自然像の変貌¹

野口 健 司

Melville の作品のなかで自然がどのように描かれているかを *Typee* から “The Encantadas” までたどり、Melville における自然像の変貌過程を概観し、その意味を考えてみたいと思います。取り上げる作品は、*Typee* (1846)、*Moby-Dick* (1851)、*Pierre* (1852)、“The Encantadas” (1854) であります。²

I

15か月にわたる捕鯨船 *Dolly* 号上での非人間的生活にうみつかれ、更にそれが3年にも4年にもおよぶのが普通であるということに絶望した *Typee* の主人公 Tommo は、捕鯨船が Marquesas 諸島の Nukuheva 島に寄港したのを機会に、友人 Toby と船から脱走し、うわさに聞く Happar 族の理想境を目指します。しかし途中の山の中で迷い、彼等がたどり着くのは、食人種として恐れられている *Typee* 族の谷であります。ところが恐怖におののく二人を迎えた *Typee* の谷は、食人種の住むところとはとても信じられない豊かな自然に恵まれた土地であります。住民達も親切で、二人の心からはカニバリズムへの恐怖感もぬぐい去られてゆきます。そのようなある日、Toby の失踪という事件がおきます。山中を彷徨中にはれ上った Tommo の足の薬を求めて Nukuheva 港へでかけた Toby が、そのまま消息不明になってしまうのです。Toby が、Tommo の救出を条件として捕鯨船に乗り組み、Tommo を島に置き去りにする結果となった事情はあとになって判明するのですが、そのような事情を知る由もない Tommo には、カニバリズムの犠牲に供されたのではないかと、再び恐怖感がよみがえります。しかし、美女 Fayaway と

-
1. 本論は、昭和52年10月、南山大学で開催された第16回日本アメリカ文学会全国大会のシンポジウムの席上で発表したものに加筆を施したものである。
 2. かつこ内は出版年又は雑誌初出の年を示す。

親切な従僕 Kory-Kory の慰めと看護に、足の傷も癒えるにつれて不安も消え、Typee の谷で幸せな日々を送ることになります。緑したたる湖沼にカヌーを浮かべ、Fayaway とたわむれる Tommo には、エデンの園でイヴとたわむれるアダムを思わせるものがあります。しかし、エデンの園に蛇がひそんでいた如く、Typee の楽園にも悪はひそんでいたのです。カニバリズムは単なるうわさではなく遂にその証拠を発見したと確信する Tommo は、追跡してくる酋長の一人を殺害するという罪を犯してまでも、島からの脱出を強行します。

このように、カニバリズムは Tommo の生命を脅かすものとして存在し、強行脱出をよぎなくさせます。しかしながら、語り手でもある Tommo のカニバリズムに対する見方は、さほど厳しいものではなく、むしろ寛容であります。文明社会と未開社会を対比させてカニバリズムを論じた第17章では、まず、ほんの数年前まで文明国のイングランドで行われていた処刑の残酷さを思えば、カニバリズムが野蛮などとはいえないのではないかと疑問を提起し、次に、文明国の白人こそ地球上の最も獰猛なる動物であると断じています。³

以上のことから、カニバリズムという悪はひめています、Typee の谷の原始的自然は、全体として、悪に汚染された文明とは対照的な理想境として描かれているといえます。明らかに、Melville は原始的自然に理想境を求めているようであります。しかし、その理想境にひめられたカニバリズムには、Melville における自然像の変貌のきざしが既にみられるように思われます。

II

悪の比重が小さいとはいえ、Typee の谷は悪をひめた楽園であります。悪の比重が大きくなり、楽園とみえるものはむしろ悪の本体がかもし出す幻覚にすぎないのではないかと懸念が高まる時、*Moby-Dick* の自然が産み出されることとなります。*Moby-Dick* の自然とは、さめによって象徴されるカニバリズムをはらんだ海であり、白鯨の君臨する海であります。

そのような海にも、楽園を思わせる穏かな日が訪れることがあります。そ

3. *Typee* (Northwestern-Newberry, 1968), p. 125.

のようなとき、ボートのふなべりに打ち寄せる波は炉端でじゃれる猫の足にたとえられます。しかし、その柔かなピロードのような足には鋭い瓜がかくされているのです。そして、この人を欺く波の穏やかさと輝きは、反撃に移る前の白鯨がみせる神々しいまでに魅力的な静けさと同じ性質のものであります。白鯨は次のように描写されています。

A gentle joyousness — a mighty mildness of repose in swiftness, invested the gliding whale. Not the white bull Jupiter swimming away with ravished Europa clinging to his graceful horns; his lovely, leering eyes sideways intent upon the maid; with smooth bewitching fleetness, rippling straight for the nuptial bower in Crete; not Jove, not that great majesty Supreme! did surpass the glorified White Whale as he so divinely swam

. . . . No wonder there had been some among the hunters who namelessly transported and allured by all this serenity, had ventured to assail it; but had fatally found that quietude but the vesture of tornadoes

And thus, through the serene tranquillities of the tropical sea . . . Moby Dick moved on, still withholding from sight the full terrors of his submerged trunk, entirely hiding the wrenched hideousness of his jaw.⁴ (539-540)

ジュピターにもまさる神々しさは、海面下に秘められた魔性をつつみ隠す衣でもあります。ここには神性と魔性を具有する白鯨がくっきりと描かれています。Ahabには悪の化身とみえても、白鯨が神であるのか悪魔であるのか、その正体は最後まで謎につつまれています。Moby-Dickにおける自然はこのような白鯨に象徴されるものであります。すなわち、魔性と神性との間を变幻自在する自然であります。そして注目すべきことは、このような謎としての自然が、魔性であれ神性であれ、人を魅了してやまないものとして描かれていることでもあります。

4. *Moby-Dick* (Hendricks House, 1952), pp. 539-40.

III

*Pierre*における自然は、南太平洋の島や大海原ではなく、一転してアメリカ国内の田園と山になります。Melvilleが*Pierre*を執筆しながら朝夕仰ぎみたGreylock山とその周辺がモデルとされています。*Typee*や*Moby-Dick*の場合のような主役的役割ではなくて、*Pierre*のロマンスの舞台背景的な役割を演じることになります。

物語の冒頭部では、*Pierre*の父祖伝来の荘園Saddle Meadowsの田園風景が牧歌的楽園として描き出されます。*Pierre*は母と婚約者Lucyとの二人の愛につつまれ幸せな青春をすごしています。しかし、ときに不安とも憧憬とも分らない気持に襲われることがあり、高い松の梢に妖しい女性の顔をみるという不思議なことがあります。その予兆はIsabelの出現となって実現し、Isabelは*Pierre*の異母姉、すなわち今は亡き父の不義の子であることを告白します。父の高潔な人格を土台として*Pierre*の心に築かれていたSaddle Meadowsの楽園は根底から瓦解することになります。

*Pierre*は不幸なIsabelを救うためにSaddle Meadowsを捨てることを決意しますが、ややもすれば迷いがちになることがあります。そのようなとき*Pierre*は森をさまよひ、樹木や彼がMemnonの石と名付ける巨石に神の助言を求めます。しかし神の声は沈黙であります。結局、自己の内なる声を神の声と信じ、*Pierre*はIsabelとの結婚を装い、New Yorkでの共同生活を始めることになります。しかし、世間知らずの青二才を迎える都会の風は冷く、*Pierre*はたちまち破滅への道をたどることになります。魅惑的なIsabelとの関係は近親相姦的なものとなり、生活の資として始めた文筆の仕事は進捗せず、更に郷里からは母の死と*Pierre*の廃嫡のしらせがとどきます。

このようにして追い詰められてゆく*Pierre*が、かつては歓喜の山と名付けられ、今はタイタンの山と呼ばれる郷里の山を、幻として眼前にみるころがあります。Saddle Meadowsのテラスから仰ぎみると、山はあざやかな紫の屹立した山容を呈しています。近付くにつれ、その紫の実態は山を覆う樹葉であることが分ります。しかし、更に近付いてまじかに接するとき、屹立した山容は暗いじめじめとした絶壁となり、絶壁の周辺に露呈するものは、湿った岩石の折り重なりと風に吹きちぎられた幹や枝が織りなす荒涼とした山肌であります。その状景は次のように語られています。

Cunningly masked hitherto, by the green tapestry of the interlacing leaves, a terrific towering palisade of dark mossy massiness confronted you; and, trickling with unevaporable moisture, distilled upon you from its beetling brow slow thunder-showers of water-drops, chill as the last dews of death All round and round, the grim scarred rocks rallied and re-rallied themselves; shot up, protruded, stretched, swelled, and eagerly reached forth; on every side bristlingly radiating with a hideous repellingness. Tossed, and piled, and indiscriminate among these . . . you saw the melancholy trophies which the North Wind, championing the unquenchable quarrel of the Winter, had wrested from the forests, and dismembered them on their own chosen battle-ground, in barbarous disdain

Stark desolation; ruin, merciless and ceaseless; chills and gloom, — all here lived a hidden life, curtained by that cunning purpleness, which, from the piazza of the manor-house, so beautifully invested the mountain once called Delectable, but now styled Titanic.⁵

自然に神を求める Pierre に対し、自然は荒涼とした暗うつの実体をさらけだすのであります。ここには幻想を打ちくだかれた Pierre の幻滅がみごとに映し出されています。

IV

Pierre が仰ぎみたタイタンの山の紫の麗姿は、つややかな紅の外観にもかかわらず、手をふれればたちまち煙と灰に化すというソドムのリングにすぎなかったのであります。そして、手にふれられ灰燼と帰したソドムのリングを、私達は “The Encantadas” にみることができます。

Nothing can better suggest the aspect of once living things malignly crumbled from ruddiness into ashes. Apples of Sodom, after

5. *Pierre* (Hendricks House, 1949), pp. 404-5.

touching, seem these isles.⁶

魔の島と呼ばれるこの群島の全貌は、劫火に焼き尽されたあとの世界にたとえられ、次のように概観されています。

Take five-and-twenty heaps of cinders dumped here and there in an outside city lot; imagine some of them magnified into mountains, and the vacant lot the sea; and you will have a fit idea of the general aspect of the Encantadas, or Enchanted Isles. A group rather of extinct volcanoes than of isles; looking much as the world at large might, after a penal conflagration.⁷

このような地獄的景観は更にふえんされ、次のように強調されます。

It is to be doubted whether any spot of earth can, in desolateness, furnish a parallel to this group

And as for solitariness; the great forests of the north, the expanses of unnavigated waters . . . are the profuondest of solitudes to a human observer; still the magic of their changeable tides and seasons mitigates their terror

But the special curse . . . of the Encantadas, that which exalts them in desolation above Idumea and the Pole, is, that to them change never comes; neither the change of seasons nor of sorrows Like split Syrian gourds left withering in the sun, they are cracked by an everlasting drought beneath a torrid sky. 'Have mercy upon me,' the wailing spirit of the Encantadas seems to cry, 'and send Lazarus that he may dip the tip of his finger in water and cool my tongue, for I am tormented in this flame.'⁸

劫火に苦しむディーヴェスにたとえられ、地獄絵として描かれた En-

6. *The Piazza Tales* (Russell & Russell, 1963), p. 185.

7. *Piazza Tales*, p. 181.

8. *Piazza Tales*, p. 182.

cantadas 群島では生物もまた同じようないろどりで表現されています。

Little but reptile life is here found: tortoises, lizards, immense spiders, snakes, and that strangest anomaly of outlandish nature, the *aguano*. No voice, no low, no howl is heard; the chief sound of life here is a hiss.⁹

そして、Rodondo 山を中心として、この群島に生息する海鳥の鳴声は “dismal din” あるいは “demoniac din” という形容で語られます。Encantadas 群島の全景は、 “In no world but a fallen one could such lands exist.”¹⁰ という言葉が要約するような “Plutonian sight” として描き出されているのです。

しかし、この暗黒の光景にも、Typee の楽園にカニバリズムの闇がひめられていた如く、明暗の交錯がひめられていないわけではありません。それは、Encantadas が別名 Galapagos と呼ばれることになった由来を示す *galapagos* という名のゾウガメとして現れるのです。この巨大なカメは黒い背部によって悪魔的な姿態をみせていますが、そのかくされた腹殻は黄金色を呈しています。そして語り手としての作者は、このゾウガメにアンビバランスな感情をいだきながらも、不毛の荒地に耐えて生きぬくその生命力に魅せられているようであります。

ゾウガメは捕鯨船をおりた帰国後も、Melville の脳裏につきまとい、作者は次のような体験を語るようになります。

. . . often in scenes of social merriment . . . I have drawn the attention of my comrades by my fixed gaze and sudden change of air, as I have seemed to see, slowly emerging from those imagined solitudes, and heavily crawling along the floor, the ghost of a gigantic tortoise, with ‘Memento * * * *’ burning in live letters upon his back.¹¹

9. *Piazza Tales*, p. 183.

10. *Piazza Tales*, p. 183.

11. *Piazza Tales*, pp. 186-7

ここでは、ゾウガメは悪魔的な死神の様相を呈して現れています。しかしこのゾウガメにも神性は付与されているのです。作者は捕獲されて船上に引揚げられたゾウガメを次のように語っています。

These mystic creatures, suddenly translated by night from unutterable solitudes to our peopled deck, affected me in a manner not easy to unfold. They seemed newly crawled forth from beneath the foundations of the world. Yea, they seemed the identical tortoises whereon the Hindu plants this total sphere.¹²

更に黒い巨大な甲羅と黄金色の腹殻に言及して、作者は“The tortoise is both black and bright.”と述べています。¹³ゾウガメの魔性は露わな背部に象徴され、神性はひめられた腹部に象徴されているのです。白鯨と同じく、ゾウガメも神性と魔性を具有するものとして描かれています。しかし、白鯨の場合は神性が海面上に露わであり、魔性が海面下にかくされていたのに対し、ゾウガメの場合は逆の構図となっています。逆の構図といえば、*Typee*との比較の場合にもあてはまります。*Typee*の場合は、明るい全体に暗い部分がひめられていたのに対し、“The Encantadas”では、暗い全体に明るい部分がひめられているのです。明暗の交錯という共通項を含みながらも、*Typee*から“The Encantadas”に至るMelvilleの自然像は、明らかに明るい絵から暗い絵へと変貌をとげているようです。

V

1841年1月、Fairhavenを出航した捕鯨船アクシュネット号は、一路大西洋を南下してHorn岬を回り、その年の秋から翌年始めの冬にかけて、Galapagos群島近海で捕鯨に従事しています。¹⁴その間にMelvilleには島々を訪れる機会があったと思われます。ビーグル号によるGalapagos群島の調査から6年経った頃のことです。Melvilleは島の動物の人を恐れぬ行動に驚いたらしく、*Typee*のなかで次のように語っています。

12. *Piazza Tales*, p. 190.

13. *Piazza Tales*, p. 189.

14. Jay Leyda, *The Melville Log* (Gordian, 1969), I, 102

I remember that once, on an uninhabited island of the Gallipagos [sic], a bird alighted on my outstretched arm, while its mate chirped from an adjoining tree. Its tameness, far from shocking me . . . imparted to me the most exquisite thrill of delight I ever experienced; and with somewhat of the same pleasure did I afterwards behold the birds and lizards of the valley [of Typee] show their confidence in the kindness of man.¹⁵

ところが“*The Encantadas*”では、同じ Galapagos 群島の動物について語りながら、以上のような鳥の親しみ易さについての言及は何もなく、恐れを知らぬ魚について次のような描写があります。

To show the multitude, avidity, and nameless fearlessness and tameness of these fish, let me say, that often, marking through clear spaces of water . . . certain larger and less unwary wights, which swam slow and deep; our anglers would cautiously essay to drop their lines down to these last. But in vain; there was no passing the uppermost zone. No sooner did the hook touch the sea, than a hundred infatuates contended for the honour of capture. Poor fish of Rodondo! in your victimised confidence, you are of the number of those who inconsiderately trust, while they do not understand, human nature.¹⁶

ここでは、呪われた魚の愚かさだけが強調され、*Typee* の場合にみられるような自然の与える喜びや自然と人間との交歓といったことは全くみられません。自然が人間に対して示す信頼という同じ対象も、見方が変れば、このように対照的な様相を呈するのです。

Melville は *Pierre* のなかで次のように語っています。

Say what some poets will, Nature is not so much her own ever-

15. *Typee*, pp. 211-2

16. *Piazza Tales*, p. 198.

sweet interpreter, as the mere supplier of that cunning alphabet, whereby selecting and combining as he pleases, each man reads his own peculiar lesson according to his own peculiar mind and mood.¹⁷

このような自然観に従えば、自然像とは自然という鏡に映し出された自画像ということになります。すなわち、Melvilleにおける自然像の変貌とは作家 Melville の自画像の変貌ということになります。そこには Melville の心象の変化の軌跡があざやかに映し出されているのです。Melville を理解するひとつの手がかりとして、その変貌過程をたどった次第です。

17. *Pierre*, p. 402.